

心の唯物論と人間の社会性・倫理性

委員会（司会者）から与えられたテーマは、「心」の問題を、(1)人間個体の脳を中心とする生理学的過程に還元する個体主義で捉えられるか、(2)体の病と類比的に捉え、医療・治療の対象とする医療主義でよいのか、(3)社会的・文化的条件との関係でどう捉えるか、というものです。私はこれらの問題を、最近出版されたガザニガの脳倫理学の議論（Gazzaniga 2005）とミラー・ニューロンの研究(Hurley and Chater eds. 2005)を手がかりに、心の唯物論擁護の立場から考えてみたいと思います。

心の唯物論は、すべての心的過程・状態を脳過程・状態と同一視する・還元する・・・立場ですが（私は最近J. Kimのスーパーヴィーニエンス説＝弱い還元主義的物理主義に賛同しています）、それは個体主義を意味しません。たしかに脳は身体各部と常に相互作用しながら、相対的に閉鎖系として存在し、そこから統合された内部状態（感覚、意識、認識主観 etc.）の成立が可能になるのですが、同時に脳は、身体を介して外部世界（他者を含む）とたえず相互作用しながら、自己の状態を成立・変化させてもいるのです。脳のこの相互作用は最近、ミラー・ニューロンの研究で新たな光が当てられています。それによれば、われわれの脳には先天的に（もちろん進化の過程で形成された）他者の動作や表情を自動的に模倣し予測しようとするメカニズムが備わっているというのです。詳しくは当日紹介しますが、意識や言語活動もこうしたミラー・ニューロン群によって可能となるとされます。つまり、人間の脳（心）は最初から社会的存在だということです。

しかし同時に、人間の心を脳（ニューラル・ネットワーク）の働きとして科学的に解明することは、たしかに技術的・医療（治療）的介入に道を開きかねません。ガザニガは脳倫理学(neuroethics)の課題を、「脳的作用に関する知見を用いて、人間とは何か、人間はどのように社会的に相互作用できるのか、またすべきなのかを、より明確にすること」（Gazzaniga 2005 p.XVIII）と定義しますが、彼はES細胞の研究や受精卵の着床前診断にけっして異を唱えていません。人間は、自分の存在についての見方の枠組みが科学によって根本的に変わることを恐れてはならない、と考えるからです(ibid.)。しかし、そのことは、脳（心）が医療技術によってどのようにでも作り変えられる、ないし、変えられてよい、ということを経験しません。人間にとって病気、正常さ、死ぬこと、ライフスタイル、生命や生活が何を意味するかという哲学的・社会的問題を、脳のメカニズムに基づく知によって議論しようとするのは、人間の脳が大変複雑な（そこには可塑性も含まれます）存在であることからすると、慎重でなければなりません。ガザニガが、薬の効果で記憶力や「頭の回転」が「改善」できるとしても、それは知性が向上したことにはならず、逆にさまざまな問題が新たに生じることになると警告するのも、そうした点からです。

心の唯物論は、われわれの知を支えているこのような複雑さをけっして単純化せず、しかしあくまで脳の実在的メカニズムに基づいて解明しようとする哲学的立場といえます。

[文献]

Gazzaniga, Michael S., 2005, *The Ethical Brain: The Science of Our Moral Dilemmas*, Dana Press. (『脳のなかの倫理――脳倫理学序説』梶山あゆみ訳、紀伊國屋書店)

Hurley, Susan and Nick Chater (eds.), 2005, *Perspectives on Imitation: From Neuroscience to Social Science, Vol.1 Mechanisms of Imitation and Imitation in Animals, Vol.2 Imitation, Human Development, and Culture*, The MIT Press.